

タジキスタン通信

Vol.7 (2026.8)



シュモー ボ ザボーニ ジョポニ フブ ギャップ ザダ メタボネッド！（日本語が上手ですね！）

7月から配属先の大学は夏休みに入りました。この間、配属先での活動はないのですが、希望者に日本語クラスを実施したり、他の日本語教育機関に顔を出したりなどして過ごしています。

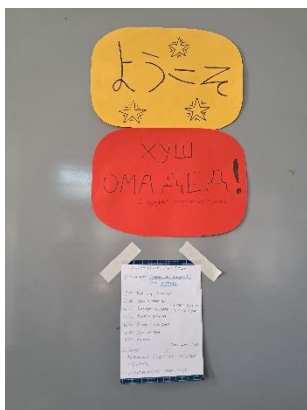
わたしが赴任した2024年末はシニアボランティアばかり4名だったタジキスタンのJICAボランティアも、その後若い協力隊員が次々と派遣され、今や二桁の大会に乗りました。今年1月に



赴任した2025年度2次隊の4名は、職種は日本語教育ではなく青少年活動なのですが、全員ドゥシャンベ近郊の町の青少年センターでそれぞれ日本語を教えています。学校が夏休みに入っても、青少年センターは子どもたちが課外活動としてスポーツや外国語学習、モノづくりなどのさまざまな活

動に参加できる機関なので、夏休み期間もあいかわらず活動しています。ドゥシャンベから車で約30分のところにあるバフダット青少年センターでは、2025年度2次隊の渡辺結衣莉隊員（旭川出身）が日本語を教えています。その渡辺隊員から、

センター内で日本語スピーチコンテストを開くので、審査員と



して参加してほしいという依頼があり、よろこんで参加しました。スピーチコンテスト出場者は全部で7名、発表テーマは「じこしょうかい」「わたしのかぞく」「かぞくとにほん」など微笑ましいものばかり。渡辺隊員の話によると、この日のために先生（渡辺隊員）



流暢なタジク語で司会をする渡辺隊員

といっしょに文を作り、一生懸命発音の練習をしたそうです。発表ではまだまだ原稿を暗記してスピーチするということまでは行っていません

でしたが、みんな日本語を学び始めてまだ半年もたっていないのに人前で発表するその勇氣に心から賛辞を送りたくなりました。結果発表後は、これからセンターで使用する教科書や渡辺隊員が提供した日本からのお土産を賞品として受け取っていました。たくさんのお土産の中から成績のいい人順に選ぶことができ、みんな自分の番が来たらうれしそうに選んでいました。全体的に手作り感満載のコンテストで、温かい気持ちになると同時に、このような機会があれば学習者のモチベーションも確実にあがると確信できたイベントでした。

第5号でお伝えした通り、タジキスタンでは毎年ドゥシャンベで日本語弁論大会が開かれます。

その弁論大会は、日本語を学び始めたばかりの学習者も参加できるように「暗唱の部」が用意されています。もちろん自分の言いたいことを、自分の言葉で伝えることも大切ですが、最初の



一歩として詩や韻文などの暗唱から挑戦してみるのもいいと思います。でもこの調子でいくと、自作の文で参加する「弁論の部」にもこのセンターから出場者が出るかもしれませんね。今後このセンターでは、タジキスタン日本語弁論大会の出場権をかけて子どもたちも切磋琢磨していくことでしょう！渡辺隊員、参加者のみなさま、お疲れさまでした！